

劣等感とその補償について

— 質問紙と TAT を用いた調査より —

友尻 奈緒美

I. 問題・目的

人間は社会的存在として、常に他者との関わりの中で生活していく。その中で、他者と自己を比較し、他者よりも劣っていることを強く意識し苦しむこと、すなわち「劣等感」を経験することがある。日常においてよく用いられる言葉ではあるが、心理学的問題として劣等感を最初に取り上げたのは Adler, A. であった。Adler (1930) は、すべての子どもは、劣等ということについて生まれながらの感情を持っており、その感情は、想像力を刺激したり、立場を改善することによってこの心理学的劣等感を消滅させようと企てると考え、劣等感の補償的側面を取り上げた。しかし補償作用が、本来の問題を解決する方向に向かわず、人生の無益な側に向かえば、本当の問題は解決されず、真の劣等感が残ったままとなるという (Adler, 1932)。

Adler の劣等感の補償作用という概念は広く受け継がれ、分析が加えられている。Allport, G.W. (1937) は、本来の意味における補償を、実際の劣等感の根源を絶えず攻撃して、それが完全になくなってしまったときに生ずるものとし、欠陥の原因が単に除去されるだけでなく、実際に力の源へと転換せしめられたときは過補償と呼んだ。加えて、困難の原因とは全く別の方向に満足を求める代償、自己弁護や合理化といった防衛機制、成功の白昼夢に自分を閉じ込める自閉的思考(空想)、精神的病気の状態になって守られようとする神経症的補償に至るまで、補償の形式の範囲は広がっていると考え、補償を人の心の根本的な能力として捉えた。

宮城 (1979) は、劣等感の補償作用には、気性の型としての強気・勝気の要素が関わり、また意志的努力によって行われるものと、無意識的になされるものを区別できると考え、この2つの次元から主に「克服的補償」・「攻撃的補償」・「運動暴発的補償」・「代用的補償」・「空想的補償」・「みせかけ補償」・「虚栄的補償」・「偽態的補償」の8つに分類して述べている。また、補償には、社会にとって有益な補償と有害な補償とがあると述べ、野口英世のように劣等感が医学の研究に向かわせる場合もあれば、犯罪などの非社会的な補償行動に向かわせる場合もあることについて、事例分析から指摘している。

以上のように、「補償」という観点は、劣等感の心理学において、欠くことのできぬもの (宮城, 1979) であり、劣等感とその補償行動を考える心理学は、人間の最も深い本性に肉薄する知恵を教えるもの (関, 1981) とされるなど、劣等感の研究者の間で重要視されている。劣等感を打ち消すための補償としての行動は、劣等感を克服し、適応するための手段である。しかしながら、常に劣等感を抱いている対象そのものを克服できるわけではなく、それが自分ではどうすることのできないものであったり、克服しようとしても挫折してしまった場合には、優越へ

向かう運動は人生の無益な側に向かい (Adler, 1932), 宮城 (1979) や Allport (1937) が挙げているような, 代償を初めとする他の形で補償の形式をとることがある。

劣等感についての実証的な心理学的研究としては, 優劣感情と攻撃性の関連について調べた研究 (吉田ら, 1988) や, 劣等感情と承認の要求との関連をみたもの (鋤柄ら, 1997), 適応性との関係からの研究 (堂野ら, 1992) などがあるものの, 劣等感を考える上で重視されてきた補償という観点については, 事例分析による理論的検討が中心で, 実証的・量的な研究はほとんど見当たらない。したがって本論文では, 劣等感を「自分が他人よりも劣っている主観的な感情」と定義し, 劣等感を感じた時に多く示される反応の特徴を捉えた上で, 劣等感を強く感じている者とあまり感じていない者との, 劣等感に対する反応や補償行動に差異が見られるかどうかについて検討することを目的とする。さらに劣等感に対する直接的な反応だけでなく, 劣等感を感じることが人格の成熟や適応にどのような影響を与えているかどうかについても合わせて検討したい。また以上の目的を鑑み, 調査対象としては同年代の他者との比較の機会が多いと推測される青年期の大学生・大学院生を選ぶこととする。

具体的方法としては, まず複数の心理尺度を用いた質問紙調査によって, 本論文の目的に従い, 劣等感の強さ, 劣等感に対する反応, 個人の成熟や適応について捉える。劣等感を測定するものとしては, 古くは牛島 (1948) の「劣等感検査」が挙げられ, また一般的に性格検査として流布しているものとして「Y-G 性格検査」の下位尺度 (I 因子) や, 柳井ら (1986) の「新性格検査」の下位尺度が存在しているが, 文章表現が時代に合わなくなっていたり, 劣等感を性格全般の一側面としての捉え方であるなど, 本研究で用いるのには不十分と考えられる。そのため本論文では, これらの既存尺度も参考にした上で, 定義に合致し, かつ調査対象である大学生・大学院生が場面を想定して回答しやすい項目を用意して, 新たに「劣等感尺度」を作成することとした。また劣等感を抱くということは, 自己のある部分について, ありのままを受け入れることが出来ていない状況と考えられるため, 「劣等感尺度」の構成概念的妥当性を検討するために, 沢崎 (1993) の「自己受容測定尺度」を同時に用いる。劣等感に対する反応や補償行動については, 自由記述による予備調査を行い, そこで得られた記述をもとに項目を収集して, 「劣等感反応特性尺度」の作成を試みる。さらに人格的成熟・適応的観点の測定を目的として, 伊藤 (1995) の「個人志向性・社会志向性 PN 尺度」を用いることとする。

伊藤 (1995) において, 個人志向性とは, 自立や個別化に向かいつつ個性を尊重し主体的に行動する特性を意味し, 社会志向性とは, 他者や社会との関係性に意識が向かい他者との共存や社会適応を志向する傾向と定義される。さらに, 個人志向性・社会志向性それぞれについて, 成熟した特性を有する肯定的 (適応的) 状態だけでなく, その否定形では表現しえない未熟で未発達な否定的 (不適応的) 状態も想定され, 2 志向性の positive/negative 両面を捉える「個人志向性・社会志向性 PN 尺度」が作成されている。2 志向性の positive 尺度得点 (P 得点) は行動面での適応と情緒安定性という両面に関わるのに対して, negative 尺度得点 (N 得点) は情緒面での不適応を捉えると考えられている。

また質問紙法では, 回答者において意識されているものしか回答に反映されず, 劣等感を感じる場面で生じている意識化されていない心の動きや補償を検討することはできない。そこで質問紙に加えて, 投映法的一种である TAT を用いて, 無意識的側面での自己像や問題・葛藤

に対する取り組み方から、意識化されえない形での劣等感や補償心性について探索的に検討する。

TAT (Thematic Apperception Test：主題統覚検査) とは、1935 年に Murray, H.A. と Morgan, S.D. によって発表された投映法の 1 つで、被検者に絵を呈示して、その絵を見て思い浮かんだ物語を自由に語ってもらい、語られた物語やその反応過程から、心に生じる動きを感じ取り、被検者のパーソナリティを理解しようとする心理検査である。

本論文では、どのように自己を捉えるのか、また危機的状況をどう扱うか、といった観点からの検討が行えるよう、TAT の図版の中で人物が 1 人だけ配されており、その人物が内省的雰囲気を持っており、かつ何らかのネガティブな状況にあると受け取られることの多い図版 1, 3BM, 20 の 3 枚を選び、劣等感の強い者とそうでない者とで何らかの差が見られるかどうかを検討する。加えて劣等感に対する反応への特徴が、TAT の物語にも表れているかという点についても、考察を試みたい。

Ⅱ. 質問紙による調査研究

(1) 方法

[1] 自作尺度の項目の選定：①「劣等感尺度」：先行研究や既存の質問紙検査の項目を参考にし、本研究の目的と劣等感の定義に合致するような刺激文 33 項目を作成した。②「劣等感反応特性尺度」：2005 年 10 月上旬に予備調査を行い、大学生 32 名（男性 9 名、女性 23 名）を対象として、劣等感を実際に意識した具体的なエピソードを一つ想起してもらい、劣等感を抱いている事についてどのように考えたか、劣等感を抱いた事柄を改善するためにどのような努力をしたか、劣等感によって生じた不快な感情をどのように解消したか、という内容に関する自由記述を求めた。この予備調査によって得られた回答をもとに、劣等感を抱いた際にどのような反応が意識されるかについて問う刺激文 37 項目を作成した。

[2] 調査時期：2005 年 10 月下旬～11 月下旬。

[3] 調査協力者：X 市内の複数の大学の大学生・大学院生 272 名（男性 141 名、女性 131 名；18-31 歳、平均年齢 21.1 歳、SD=1.759）。

[4] 調査手続き：質問紙の配布は筆者及び筆者の知人によって、協力者に配布し、記入後直接配布者に手渡してもらうか、指定の回収ボックスに入れてもらった。回答は基本的に無記名で行ったが、最後に面接調査（TAT）への協力の意思がある場合のみ、名前と連絡先の記入を求めた。自作尺度の「劣等感尺度」と「劣等感反応特性尺度」については、「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 5 件法で、1 つを選んで回答してもらった。既存尺度の「自己受容尺度」（沢崎, 1993）および「個人志向性・社会志向性 PN 尺度」（伊藤, 1995）については、先行研究と同じ方法（いずれも 5 件法）で回答を求めた。

表1 劣等感尺度項目

1自分の心は誇れるものではなく、自信が無い。
2友人が自分の知らないことについて自慢げに話していると自分の教養の無さを感じる。
3人から邪魔にされはしないかと心配である。
4何かにつけて自信がない。
5☆自分が好意を持っている女性(男性)が他の男性(女性)と楽しげに話しているのを見ると、自分はその男性(女性)と比べて魅力がないと思えてくる。
6自分には何のとりえもないので、責任ある仕事をすることはできない。
7困難にあうと、すぐうろたえてしまう。
8自分は学問をするために必要な思考力を備えていない。
9人前で顔が赤くなるので困ることが多い。
10身体が弱いので、すぐ病気にかかりやすく、嫌な思いをする。
11多くの点で人にひけめを感じる。
13運動・スポーツが人並みにできる自信はないので、誘われてもやりたくないと思う。
15友人の家庭をひどくうらやましく思うことがある。
17あまり迷わずに決心がつく。＊逆転項目
18自信がないので、他人の意見に反論できず悔しい思いをする。
19困難にぶつかると気がくじける。
20不器用なので、こまごまとした仕事が出来ず、イライラする。
21うそをついたり、何らかの不正をして隠した後は、自分は悪い人間であると思ってしまうようになる。
22☆男性(女性)は女性(男性)よりも劣っていると思う。
24自分は一般的な教養に欠いていると思う。
25仲間からの信頼が薄いので、誰も自分に従わないと感じる。
26動きがのろいので、生き生きと元氣よく振る舞えない。
27人の言いなりになってしまうことがある。
28自分には性的な魅力はあまりないと思う。
29見た目によい体型ではなく、他人にはあまり見られたいと思う。
30顔かたちが男劣りするので、人前に出たくない。
32自分はつまらない人間だ。
33社会の動きについていけず、流行に乗り遅れていると思う。
☆印の項目は、男性の協力者には本文通り、女性の協力者には括弧内を見て答えるよう求めた。

(2) 結果・考察

〔1〕「劣等感尺度」の作成と信頼性・妥当性の検討

逆転項目については、劣等感が強く意識される方が得点が高くなるように点数を変換した上で、回答の選択肢をそのまま得点化し、全項目を合計した。G-P 分析を行い、弁別力が低いと判断された5項目を除外し、残った28項目についてクロンバックの α 係数を算出したところ、 $\alpha = 0.90$ であり、内的整合性が確認された。よって、この28項目で構成される尺度を「劣等感尺度」、および28項目の合計点数を劣等感尺度得点とし、本研究で用いることにした(表1)。劣等感尺度得点の平均は、男性72.43点(SD=16.82)、女性75.82点(SD=16.27)、全体で74.06点(SD=16.62)であった。性差を検討するためにt検定を行なったところ、男性よりも女性の方が得点が高い傾向が見られた($t=1.684$, $df=270$, $p<.10$)。Allport (1937)

や関(1981)は女性が劣等感を多く持ちやすいことについて述べており、本調査でも男性と比較して女性の方が劣等感を強く意識している可能性が示唆されたが、統計的に有意な差とまでは認められなかった。

加えて、沢崎(1993)の「自己受容測定尺度」を用いて、劣等感尺度の構成概念的妥当性の検討を行った。劣等感尺度得点と自己受容測定尺度全体の得点の相関を求めたところ、負の相関があり有意であった($r = -.652$, $p < .01$)。また、自己受容測定尺度には「身体的自己」・「精神的自己」・「社会的自己」・「役割的自己」・「全体的自己」の5つの下位領域が設定されているため、各領域の下位項目得点と劣等感尺度得点との相関を求めたところ、全て負となり有意であった($r = -.336 \sim -.641$, $p < .01$)。これによって、劣等感を強く抱いている場合ほど自己受容はなされにくいことが示された。また劣等感尺度得点によって、協力者を劣等感 High 群(82点以上, 90人, 33.1%, 以下H群), Middle 群(68 - 81点, 92人, 33.8%, 以下M群), Low 群(67点以下, 90人, 33.1%, 以下L群)の3群に分け、後の分析に用いることにした。

〔2〕「劣等感尺度」と「個人志向性・社会志向性PN尺度」との関連

伊藤(1995)の「個人志向性・社会志向性PN尺度」の個人志向性P尺度・N尺度、社会

表2 各群の個人P・社会P・個人N・社会N得点の平均値

	個人P		社会P		個人N		社会N	
	平均得点	SD	平均得点	SD	平均得点	SD	平均得点	SD
H群(90人)	2.97	0.61	3.57	0.59	3.06	0.67	3.77	0.56
M群(92人)	3.39	0.45	3.74	0.45	2.88	0.57	3.18	0.56
L群(90人)	3.90	0.57	3.83	0.60	3.11	0.92	2.70	0.64
全体(272人)	3.42	0.66	3.71	0.56	3.02	0.74	3.22	0.73
F値	65.34**		5.32**		2.45+		76.21**	
	L>M>H**		L>H**, M>H+		L>M+		H>M>L**	

**: $p<.01$ +: $p<.10$

志向性P尺度・N尺度の4尺度それぞれの項目点数の平均を求め、個人志向性P得点・個人志向性N得点・社会志向性P得点・社会志向性N得点（以下、個人P得点・個人N得点・社会P得点・社会N得点）

とした。これらの4尺度得点について、1要因3条件（H群/M群/L群）の分散分析を行った。その結果、個人P得点、社会P得点、社会N得点について、劣等感尺度得点の群の主効果が有意であり、個人N得点についても有意傾向が示された [$F(2, 269) = 65.35, p<.01$; $F(2, 269) = 5.32, p<.01$; $F(2, 269) = 76.21, p<.01$; $F(2, 269) = 2.45, p<.10$]（表2）。そこでテューキーのHSD法による多重比較を行なった結果、個人P得点は劣等感の低い者ほど高かった（L群>M群>H群, $p<.01$ ）。また、社会P得点ではL群がH群より有意に高く（ $p<.01$ ）、M群がH群より高い傾向がみられた（ $p<.10$ ）。社会N得点では劣等感の低い者ほど高い（H群>M群>L群）ことが示された（ $p<.01$ ）。また有意ではないものの、個人N得点ではL群がM群よりも高いという傾向がみられた（ $p<.10$ ）。

H群は、個人・社会ともにP得点が低く、社会N得点が高いという特徴が示された。したがって、劣等感を強く感じている者の方が、自分自身の内的基準に沿って主体的に行動することは難しく、個人志向性の肯定的な側面を獲得できていない。また他者との共存や社会適応に望ましい特性が劣等感をあまり感じない者よりも獲得されておらず、他者に一方的に依存したり、自分を殺してまで過剰に適応してしまうといった未熟な対人関係になりやすいと想定される。他方、劣等感をあまり感じていない者は、個人・社会ともにP得点が高く、個性を尊重しつつ、社会適応状態も良いと感じられ、より情緒的に安定した状態にあるといえる。しかしながらL群では、社会N得点は3群中最も低いものの、個人N得点は高い傾向にあり、自己愛・利己主義的な側面によって、周囲との齟齬を生み出してしまう傾向もあるようである。堂野ら（1992）は劣等感が強い者に高い不適応傾向を示す者が多く、逆に劣等感が弱いものには不適応傾向を示す者が少ないと述べており、本結果も同様の結果が示唆されたと言えるが、劣等感をあまり感じない者の場合、強い個人主義によって、自分の劣等性を気にしないのと同様、自分の個性の強い振る舞い方が他者に与える負の影響を省みず、利己的に振る舞ってしまう傾向も示唆され、一義的に適応的と捉えることには疑問が残る。

〔3〕「劣等感反応特性尺度」の因子分析結果

37項目の質問項目を用いて因子分析（主因子法、スクリープロットにより因子数を決定、プロマックス回転）を行った。ただし、各項目のうち、因子負荷が.40に満たなかった8項目を削除し、再度因子分析（主因子法）を行った。因子数はスクリープロットにより判断し5因子とし、プロマックス回転を行った。その因子負荷を表3に示した。第1因子は、「人よりできないと思うと、もっと努力して頑張りたい」、「自分よりできる人を目標として、努力したい」など、劣等性を認識しつつも努力を志向する項目に対して負荷量が高く、「努力志向性因子」

表3 劣等感反応特性項目における因子負荷量（主因子法、プロマックス回転後）

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
18 人よりできないと思うと、もっと努力して頑張りたいと思う。	0.820	0.104	-0.101	-0.030	0.118
17 苦手だと思っても、あきらめずに努力を続けて、少しずつでも克服していく。	0.806	-0.013	-0.168	0.067	0.313
4 自分が人より劣っていると思うことは、もっと努力して克服していくべきだと思う。	0.675	0.082	-0.169	-0.036	-0.004
7 自分よりよくできる人を目標として、努力したいと思う。	0.643	-0.033	0.180	0.073	-0.151
24 人と比べてうまくできないことは、もっと努力することによって少しでも上達できれば嬉しいと思う。	0.593	-0.110	0.100	0.086	-0.054
32 人よりできないと感じることは、陰で努力して頑張る方だ。	0.591	0.084	0.001	0.079	0.063
19 たとえ自分よりよくできる人であっても、自分にとってよいライバルである。	0.500	-0.125	0.221	-0.116	-0.068
21 他の人が、何かを自分より上手にやっているのを見ると、自分もその人のようにもっとうまくできるようになりたいと思う。	0.470	-0.056	0.007	-0.072	-0.356
10 他の人より自分ではできないと思うと、あきらめる。 * 逆転項目	-0.452	0.354	0.081	0.065	-0.106
33 苦手なことは努力しても決して上手くなれないと思う。 * 逆転項目	-0.418	0.291	-0.026	0.113	0.022
34 自分が相手よりできなくて悔しさを感じると、嫌味っぽく褒めてしまうことがある。	-0.024	0.622	0.006	-0.212	0.049
27 自分が劣等感を感じる相手とは、差し障りのない会話だけをし、核心の話題には触れないようにする。	0.069	0.574	-0.019	0.012	0.039
37 人と比べてできなくて悔しい思いをしたことは、無理にでも忘れたい。	-0.129	0.573	0.048	0.127	0.002
35 相手が得意としていることを話しているとき、「どうせ私にはできない」などと言うことがある。	-0.146	0.474	0.009	-0.056	-0.070
13 自分よりも相手の方が物事をうまくやっているのを見ると、敵意を感じる。	0.207	0.473	-0.058	-0.113	-0.195
36 自分が苦手としていることが話にあがったときは、話題を変えようと促す。	-0.012	0.464	0.122	0.031	0.052
6 人よりできないことがあっても、他に自分ができることをしていけば大丈夫だと思う。	0.017	-0.038	0.756	-0.094	0.070
1 人よりできないことを頑張るよりも、自分の得意な分野をもっと頑張って良い成果を出したいと思う。	-0.029	0.154	0.689	-0.078	-0.042
28 苦手なことを思っ嘆くより、自分の強みを探してそのことについて考えることが多い。	0.002	0.108	0.424	0.070	0.216
23 他の人が自分より上手くやっても、気にしないことにしている。	-0.206	-0.054	0.420	0.092	0.378
9 その人に対して「悔しい」と思っても、態度で相手に示すことはない。	-0.010	-0.036	0.029	0.682	0.007
8 相手に対して劣等感を抱いても、相手には自分の感情を悟られたくないと思う。	0.147	0.298	-0.043	0.602	-0.121
20 自分が相手よりできなくて悔しいときは、相手の前でも泣くことがある。 * 逆転項目	0.070	0.076	0.015	-0.586	0.102
29 相手よりも自分の方が劣っていると気づいて悔しい時は、相手に自分の態度（泣く等の行為、言動、表情など何でも可）で悔しさを示す。 * 逆転項目	-0.007	0.177	0.122	-0.512	-0.060
26 サークルなど、同じことをやっている友人と比べて、自分はあまりよくできなくても、皆同じ仲間であることには変わりなく、優劣の差を感じることはない。	0.023	-0.171	0.062	0.046	0.520
31 人より劣っていることを認識し、「悔しい」という感情が生じるのは当然のことだと思う。 * 逆転項目	0.241	0.040	0.142	0.173	-0.469
2 チームプレーなど他の人と一緒に何かするとき、自分だけ他の人よりできなくても、自分ができないことを謝るより、「みんなと一緒に頑張ろう」という振る舞いをする。	0.161	0.087	0.094	-0.079	0.447

表4 因子相関行列

因子	努力志向性因子	防衛反応因子	代償志向性因子	劣等感の表出抵抗因子	劣等感の否認因子
努力志向性因子	1.00	-0.12	-0.05	0.00	-0.24
防衛反応因子	-0.12	1.00	-0.09	-0.13	-0.19
代償志向性因子	-0.05	-0.09	1.00	0.30	0.04
劣等感の表出抵抗因子	0.00	-0.13	0.30	1.00	-0.09
劣等感の否認因子	-0.24	-0.19	0.04	-0.09	1.00

とした。第2因子は、「相手よりできなくて悔しさを感じると、嫌味っぽく褒めてしまうことがある」、「劣等感を感じる相手とは差し障りのない会話だけを

し、核心の話題には触れない」などに対して負荷量が高いため、「防衛反応因子」とした。第3因子は、「人よりできないことがあっても、他に自分ができることをしていけば大丈夫」、「人よりできないことを頑張るよりも、自分の得意な分野をもっと頑張って良い成果を出したい」などに対して負荷量が高く、「代償志向性因子」とした。第4因子は、「悔しいと思っても、態度で相手に示すことはない」などの項目で負荷量が高く、「相手よりできなくて悔しいときは、相手の前でも泣くことがある」などの項目で、負の高い負荷量を示していることから、「劣等

感の表出抵抗因子」とした。第5因子は、「自分はあまりよくできなくても、皆同じ仲間であることに変わりなく、優劣の差を感じることはない」などの項目で負荷量が高く、「劣等感の否認因子」とした。なお、因子間相関は表4のようになった。

この5因子に該当する項目で構成される5尺度を下位尺度とし、逆転項目は下位尺度内の他の項目と同じ性質を示すように点数を変換した上で、下位尺度の得点の平均値を求め、また各尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの α 係数を算出した。努力志向性尺度・防衛反応尺度・代償志向性尺度・劣等感の表出抵抗尺度については $\alpha = .67$ 以上の内部一貫性が示されたので、尺度として採用したが、劣等感の否認尺度については $\alpha = .48$ であり、項目数も少ないことから、尺度として用いないことにした。

[4]「劣等感尺度」と「劣等感反応特性尺度」の関連

得られた4尺度について、それぞれ同様に劣等感尺度得点による群を要因とする1要因3条件の分散分析を行ったところ、防衛反応尺度得点と代償志向性尺度得点について有意であった[$F(2, 269) = 20.30, p < .01$; $F(2, 269) = 16.97, p < .01$] (表5)。テューキーのHSD法による多重比較を行なった結果、防衛反応尺度得点についてはH群は他の2群よりも有意に高く($p < .01$)、代償志向性尺度得点については劣等感得点の低い者ほど有意に高かった(L群 > M群 > H群, $p < .01$)。

防衛反応尺度得点の平均値は、H・M・L群とも3点未満であり、劣等感を抱いた際の反応として、それほど多く生じるものではないと考えられるが、3群間に有意差が見られ、劣等感を特に感じやすい者の方が、劣等感を感じる相手に対して攻撃性を露呈する、あるいは劣等感を生じるような場面を意識的に回避しようとするといった、防衛的な行動に繋がる可能性が比較的高いことが示唆される。この防衛反応因子が示す傾向は、劣等感に対する一時的な反応に過ぎないが、防衛反応が固定化され、宮城(1979)が指摘する「運動暴発的補償」や「攻撃的補償」といった二次的な性格の変化が生じる場合もあると考えられ、また劣等感を強く感じやすい者ほど、相対的にその可能性が高まると想定される。

また劣等感の強い者では、代償志向性尺度得点は低く、他の目標や行動によって劣等感を補おうとする方向には向かわず、他のことで認められることには価値を置きにくいようである。L群で代償志向性尺度得点が高いことから、代償という方法は、自己の価値を保ち、劣等性を認識して生じる不快な感情を軽減するために機能していると考えられ、劣等性そのものを克服する訳ではなくとも、適応的側面を支えていることが示唆される。

努力志向性尺度得点と劣等感の強さとの間には関連は見いだせなかった。努力志向性尺度は、劣等感を抱いた対象そのものに直接働きかける、克服的な補償の傾向を表しているが、劣等感の感じやすさとは関連が無く、劣等性を意識して努力する方向に向かうかどうかは、他の個人の要因によると考えられる。劣等感の表出抵抗尺度得点も、劣等感尺度得点との関連は見られず、また4尺度中平均得点が最も高いことから、全体的に劣等感を表出することは抑制される傾向にあると考えられる。

[5] 質問紙による調査研究のまとめ

以上より、劣等感の強い者は、個人志向性・社会志向性両者の成熟した適応的な特性があまり獲得できておらず、対人関係において他者への一方的な依存や、自分を殺してまで相手に合

表5 各群の劣等感反応特性下位尺度得点の平均値

	努力志向性得点		防衛反応得点		代償志向性得点		劣等感の 表出抵抗得点	
	平均得点	SD	平均得点	SD	平均得点	SD	平均得点	SD
H群(90人)	3.66	0.63	2.82	0.61	3.01	0.76	3.92	0.83
M群(92人)	3.78	0.60	2.42	0.66	3.32	0.66	3.98	0.68
L群(90人)	3.83	0.70	2.20	0.72	3.64	0.75	4.05	0.71
全体(272人)	3.76	0.65	2.48	0.71	3.32	0.76	3.98	0.74
F値	1.75		20.30**		16.97**		0.69	
			H>M,L**		L>M>H**			

**: $p < .01$

わせるような過剰適応を示す傾向が示唆された。自分の劣等性を意識させられる場面で防衛的姿勢を示す傾向が、比較的高く、また代償によって補償しようとする試みは少ない。他方、劣等感をあまり感じない者は、個人的・社会的両面において適応的な行動が取れていると自覚さ

れ、代償的補償によっても自己の価値を保っているが、他者への調和や共感を欠いた利己主義や自己愛によって周囲との齟齬を生むといった不適応的側面も示唆される。努力によって克服して劣等感を補償しようとする傾向と、劣等感を表出することへの抵抗については、劣等感を強く抱く者とそうでない者との差は見られなかった。

しかし、本論文で用いた「劣等感反応特性尺度」は、実際に劣等感を感じて意識されている現象から作成されたものであり、偏りも見られる。最近の研究（高坂, 2009）によると、容姿・容貌に対する劣性を認知した時に生じる反応行動として、他者回避／直接的な努力／他者攻撃／気晴らし／放置／賞賛・承認欲求／代理補償の7側面が指摘されている。「気晴らし」や「賞賛・承認欲求」といった、本論文では捉えられなかった劣等感に対する直接的な反応以外の反応行動や、空想による補償など Allport (1937) や宮城 (1979) が指摘している他の形式での補償作用についても検討する必要がある、今後の課題としたい。

Ⅲ. TAT による調査研究

(1) 方法

〔1〕調査時期：2005年11月。

〔2〕調査協力者：質問紙調査の協力者の中で面接調査への協力の意思を示した者のうち、劣等感尺度得点によってH群およびL群に分類された者にTATを施行した。H群の協力者は10名（男性5名、女性5名；18-22歳、平均年齢19.7歳、SD=1.16）、L群の協力者は8名（男性4名、女性4名；20-22歳、平均年齢20.9歳、SD=0.64）であった。

〔3〕用具：Harvard版TAT図版のうち、図版1, 3BM, 20の3枚を使用した。反応録音用にICレコーダーを用いた。

〔4〕手続き・指示：協力者それぞれについて、個別面接法で行った。「1枚の絵について1つずつ、お話を作ってもらいたと思います。それぞれの絵について、今どうなっているのか、絵の中にいる人はどんなことを考えたり感じたりしているのか、前にどんなことがあってそうなったのか、これからどうなっていくのか、ということについて、心に思い浮かんだままにお話下さい。」と指示した。また協力者の了承を得た上で、反応内容を筆者が筆記、録音した。

表6 図版1〈現在の状態〉のテーマ

	H群	L群	計	
A 悩んでいる	a 他者関与	5	5	10
	b 個人内問題	4	2	6
	計	9	7	16
B 空想・精神統一		0	0	0
C その他		1	1	2
計		10	8	18

 $p=0.63$
 $p=1.00$

表7 図版1〈物語の結末〉のテーマ

	H群	L群	計	
A 解決した・しようとしている	a 他者の関与あり	6	1	7
	b 他者の関与なし	3	5	8
	計	9	6	15
B 解決していない		1	1	2
不明		0	1	1
計		10	8	18

 $p=0.12$
 $p=1.00$

(2) 結果・考察

以上の手続きによって語られた TAT の物語は、各図版について〈現在の状態〉と〈物語の結末〉の2点についてテーマを分類した。分類の評定は調査で得られた物語の33%について、筆者と他の1名で独立に行ったところ、88%の一致をみたので、信頼性のあるものとして、残りは筆者のみで行った。H群とL群でそれぞれのテーマの出現に差があるかどうかを検証するために、Fisherの直接確率法を用いて検定を行った。

(1) 図版1

伊藤（1994）を参考に、〈現在の状態〉については、主人公の少年の心理状態に関して、悩んでいる（A）、空想あるいは精神統一している（B）、その他（C）の3カテゴリーに分類し、さらにAの悩みの原因については、その原因に他者が関与しているもの（a）と、個人の内的問題によるもの（b）とに下位分類した（表6）。その結果、空想状態・精神統一とした者はおらず、悩んでいるとした者とそう捉えなかった者について群による差はなかった（ $p=1.00$; n.s.）。また悩みの原因についても群による差は見られなかった（ $p=.63$; n.s.）。〈物語の結末〉に関して、問題・葛藤は無いが解決された、もしくは主人公が前向きに解決しようとしているもの（A）と、問題・葛藤は未解決もしくは失敗に終わったもの（B）に分類した。さらにその解決について、他者の関与（助け）があったもの（a）と、他者の関与がなかったもの（b）に分類した（表7）。その結果、問題・葛藤が解決されたかどうかでは2群間に有意差はなく（ $p=1.00$; n.s.）、問題解決の方法でも、有意な差は見られなかった（ $p=.12$; n.s.）。

鈴木（1997）によると、たいていの人（80～90%）は、少年に悩み、悲しみ、不安といったネガティブな内的状態を認めるとされている。両群とも殆どの者が少年の悩みを取り入れて物語を語っており、その悩みの原因、問題・葛藤が将来解決するかどうか、解決の方法のいずれにおいても両群に差はなかった。しかし結末の詳細な内容に注目すると、H群の男性3名においてのみ、〔過去に天才と言われていたが、感情が込められていないと指摘され悩んでいる。でもこれからすごく良い事があって、大人になって巨匠と呼ばれるようになる〕【H群】といった、少年は将来バイオリンで大成するという物語が語られた。うまく弾けない悩みを克服してバイオリンを続けていくという物語はL群やH群女性でもみられるが（〔バイオリンがうまく弾けずに悩んでいるが、もう1回立ち上がって弾き始める〕【L群】など）、このH群の男性3名では“巨匠と呼ばれる”などの社会的な成功が述べられているのが特徴的である。少年をとてつもない天才とし、その成功の物語を語ることにについて、鈴木（1997）は、卑小な自己のイメージの補償を表わすと指摘している。また物語を構成して語るTAT反応において、同性である少年に託して社会的な成功を思い浮かべやすいということは、空想の中で自分が偉くなったと考えて

表8 図版3BM〈現在の状態〉のテーマ

		H群	L群	計	
A 精神的な 苦悩・悲嘆 の状態	a 大切な人との関係の破綻・消滅	3	5	8	$p=0.04$
	b 自分自身の犯した悪行や失策	5	0	5	
	c 長期にわたる過酷な境遇	0	1	1	
	不明	0	1	1	$p=1.00$
	計	8	7	15	
B 身体的な疲労・変調の状態		2	1	3	
計		10	8	18	

表9 図版3BM〈物語の結末〉のテーマ

		H群	L群	計	
A 解決した・ しようとしている	a 他者の関与あり	3	1	4	$p=0.58$
	b 他者の関与なし	5	5	10	
	計	8	6	14	$p=1.00$
B 解決していない		2	2	4	
計		10	8	18	

劣等感を補償する宮城（1979）の空想的補償や、Allport（1937）の自閉的思考（空想）による補償に親和的な傾向があると考えられることもできよう。

〔2〕図版 3BM

＜現在の状態＞について、鈴木（1997）の着眼点に従って、精神的な苦悩・悲嘆の状態（A）と、身体的な疲労・変調の状態（B）に大別し、さらに（A）は苦悩・悲嘆の内容によって、大切な人との関係の破綻・消滅（a）と、自分自身の犯した悪行や失策（b）、長期にわたる過酷な境遇（c）の3カテゴリーに分類した（表8）。その結果、テーマAとBについて、分布に群による有意な差はみられなかった（ $p=1.00$ ；n.s.）。しかし苦悩・悲嘆の内容については、自分自身の犯した悪行や失策（b）はH群に多いことが示された（ $p=0.04$ ）。＜物語の結末＞に関しては図版1と同様、問題・葛藤は無いか解決された、もしくは前向きに解決しようとしているもの（A）と、問題・葛藤は未解決もしくは失敗に終わったもの（B）に分類し、Aについては他者の関与があったもの（a）と、なかったもの（b）に下位分類した（表9）。その結果、問題・葛藤が解決されている否か、問題解決の方法とも2群間に有意差は見られなかった（ $p=1.00$ ；n.s., $p=.58$ ；n.s.）。

図版3BMについて、坪内（1984）は否定的自己イメージ探索するカードとし、鈴木（1997）は人物の悲嘆、苦悩の原因としての出来事や状況をどのようなものとするかに、悩んだりするかということに、被検者自身の価値観、価値意識が反映すると考えている。この点をふまえると、苦悩・悲嘆の原因にH群とL群で異なる傾向があることは極めて興味深い。代表例を挙げると、H群では「たくさん買い物をしたが全て電車で置き忘れ、絶望して酒を飲んでいる。駅に尋ねることで気持ちの整理をするが、後悔の念が強い」、L群では「男にふられて1人で酒を飲みダウンしているが、翌朝は立ち直る」といった苦悩・悲嘆の原因と展開が語られていた。

鈴木（1997）によると、苦悩・悲嘆の原因は大切な人との関係が断たれてしまうことである場合とすることが最も多く、この種の反応を与えることは、一般的な価値観によって生きているということの意味する。それに対し、自分自身の犯した悪行や失策のゆえに悲嘆・苦悩の状態にあるとするものでは、他者との関係より自己自身との関係が主に問題となっている（鈴木，1997）ことから、H群では、否定的な自己イメージとして、内的葛藤の中で、自責の念や自己嫌悪を抱き、悩み苦しむ自分の姿が想像されやすいという特徴が示唆される。

〔3〕図版 20

＜現在の状況＞は、鈴木（1997）の着眼点に従って、絵中の人物を正しく認知しているもの（A）とそうでないもの（B）で分類し、Aについては人物は何ものかを喪失したもの（a）、人物は

表10 図版20〈現在の状態〉のテーマ

		H群	L群	計
A 正しく人間 を捉えている	a 何ものかを「喪失」した	0	1	1
	b 何ものかを期待している	5	2	7
	c その他	3	1	4
	計	8	4	12
B 人間を正しく捉えていない		2	4	6
計		10	8	18

$p=0.32$

表11 図版20〈物語の結末〉のテーマ

		H群	L群	計
A 正しく人間 を捉えている	A 解決した・しようとしている	6	0	6
	B 解決していない	1	4	5
	不明	1	0	1
	計	8	4	11

$p=0.0$

何ものかを期待しているもの (b), その他 (c) の3カテゴリーに下位分類した (表10)。その結果, 正しく人間を認知しているかどうか群の有意差は見られなかった ($p=0.32$; n.s.)。また〈物語の結末〉について, 問題・葛藤が無いか解決されたもの (A) と未解決のもの (B) で分類したところ (表11), H群では解決された方が多くL群では未解決の状態が多かった ($p=0.02$)。L群では解決されたと分類されたものが無かったため, 他者の関与の有無については分析しなかった。

鈴木 (1997) によると, 身体の大部分は不明であるにもかかわらず, 健常者の90%以上の人が一人の人物を認知するとされているが, 本調査ではH群で20%, L群では50%が正しく認知していなかった。鈴木 (1997) は, 正しく認知しえないことの要因として, (1) 人間に対する関心の薄さ, (2) 萎れた男性像の拒否, (3) 語り手の明るさ志向あるいは暗闇嫌悪, を挙げている。H群とL群の差は有意ではないものの, 鈴木 (1997) のデータと比較すると, L群で正しく認知できていない者の割合は非常に高い。劣等感をあまり感じないことと, 周囲の他者への意識の向け方あるいは自己像の捉え方には, 何らかの関連があると推測され, 落ち込んだ人間像に対する拒否的な心性があり, 意識的な葛藤を持ちにくいといった可能性も考えられる。

物語の結末については, H群では問題が解決するケースが多く, L群では問題解決はみられなかった。葛藤解決・成功の物語の内容に着目すると, 人を待っているテーマが多く共通して見られた (H群4名, L群2名)。人を待っているテーマが語られたH群の物語は, 待ち人は来なかったものの後に再会して和解する (1名), 長く待ち続けてはいるが最終的には待ち人が現れる (3名) という展開であった (〔男性は, 海外に行く女性と数年後にここで会う約束をする。約束の日, 男性は夜遅くまで待つが女性は来ず, 諦めて帰ろうとした時に女性が現れて再会する〕【H群】)。一方, L群では, 待ち人は来なくとも, 自分で諦めをつけ心の整理をして帰る (2名) という展開 (〔離れ離れになった恋人と10年後にここで待ち合わせようと約束して, 男性は女性を待っている。何時間も待つが女性は来ず, 「元々来ないと思っていたし」と諦めて帰る〕【L群】) がみられた。それぞれ親密で心情的に会いたいと思っている人を待っているという点で, 他者と愛着にもとづく関係を持つことができる (鈴木, 1997) と言える。ただし, H群に特徴的な最後には他者との再会が果たされるという展開は, 他者に対して誠実であり, またそうされることを相手にも強く期待する心性が含まれているとも考えられる。L群で見られた, 自分で心の整理をつけて諦めて帰るという展開と対照的であり, 葛藤解決の方法という観点からは, 自力で乗り越えるよりも, 相手が自分の期待に沿うことで葛藤の解消を図るという, 依存的な側面が反映されている場合もあると推測される。有意ではないが, 図版1や3BMにおいても, 物語の結末で問

題・葛藤が解決される場合に、H群の方に他者の関与が多く見られることも、劣等感の強い者の葛藤の解決の在り方の特徴の一つとして表れている可能性があり、「個人志向性・社会志向性PN尺度」で社会N得点が高かったこととも矛盾しない。

〔4〕TATによる調査研究のまとめ

以上のように、劣等感を強く感じている者とあまり感じていない者に対して、TATを用いた探索的な考察を行った。3図版についての検討を通して、劣等感を強く感じている者は、否定的な自己イメージを内的葛藤と結び付けて捉えやすいことが示唆され、葛藤解決において他者に依存的な傾向が疑われること、またTATの反応で卑小な自己イメージを補償するような物語を語る者が複数見られ、空想的な補償に親和性がある可能性について指摘された。本論文では、数量的検討に十分な人数を調査で扱うことができず、仮説レベルに留まるが、質問紙による尺度からの検討では捉えられなかった面について補完されたと考えられる。

Ⅳ. 総合考察

本論文では、質問紙およびTATによる調査研究によって、劣等感を強く感じている者とあまり感じていない者として、劣等感に対する反応、および人格の成熟・適応といった観点から、心理的特徴に差異が見られるかどうかについて中心に検討された。劣等感を強く感じている者は、自分自身の個性を尊重して主体的に行動することが難しく、他者とよりも自己自身との関係に悩んで葛藤を生みやすい状況にあり、相対的に個が確立されていないと考えられる。対人関係においても、相手に一方的に依存したり、主体性に欠ける過剰適応といった未熟的な面や、自己の劣等性を意識する場面で防衛的な態度が比較的取られやすいなどの情緒的に不安定な面も想定される。他方、劣等感をあまり感じない者は、個をより確立させており、適応的に他者と関係を持つことができると捉え、情緒的には安定している状態にある。しかしながら、個性の強い振る舞い方が他者に与える影響を顧みず、利己主義的な傾向も示唆され、その背景には、否定的な自己像を捉え、内省を深めることの難しさ、意識的な葛藤の持ち難さといった点も伺われる。劣等感に対する反応として、代償が相対的に多く用いられる傾向にあったことも、自己の劣等性に直接向き合うことを避け、他の事で満足を得ていくことで情緒的安定を保とうとするありようと受け取れる。

劣等感とは他者との比較によって生じる感情であるが、本論文では、対人的側面のみならず、個の確立といった内的成熟の問題との関連も重要であると考えられた。劣等感に対する反応に関しても、劣等感の強い者とあまり感じない者で異なる傾向が見られ、両者の心理的特徴が示されたが、質問紙調査では捉えられなかった側面も想定された。劣等感が強い者の一部のTAT反応に見られた空想的補償など、詳しい検討の余地があると考えられ、今後の課題とする。

付記：本論文は、京都大学教育学部に提出した卒業論文に加筆・修正したものです。ご指導賜りました伊藤良子先生、河合俊雄先生、そして調査協力者の皆様に、心より感謝申し上げます。

<引用文献>

- Adler,A.(1930) : The Education of Children. 高橋堆治(訳)(1962) 子どもの劣等感—問題児の分析と教育 誠信書房
- Adler, A(1932) : What Life Should Mean to You. 高尾利数(訳)(1984) 人生の意味の心理学 春秋社
- Allport,G.W.(1937) : Personality :A Psychological Interpretations. : 詫摩武俊・青木孝悦・近藤由紀子・堀正(訳)(1982): パーソナリティー—心理学的解釈 新曜社
- 堂野佐俊・田頭穂積・三藤佳子(1992) : 青年期における劣等感と適応性との関係 研究論叢 第3部 芸術・体育・教育・心理 (41), 31-46
- 伊藤美奈子(1994): 欲求と葛藤解決から見た自他関係についての一考察 心理臨床学研究 12(1) 73-79
- 伊藤美奈子(1995): 個人志向性・社会志向性PN尺度の作成とその検討 心理臨床学研究 13(1) 39-47
- 高坂康雅(2009): 青年期における容姿・容貌に対する劣性を認知したときに生じる感情と反応行動の関連 教育心理学研究 57 1-12
- 宮城音弥(1979): 劣等感—その本体と克服— 東京書籍
- 沢崎達夫(1993) : 自己受容に関する研究 (1) —新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討— カウンセリング研究 26 (1) 29-37
- 関計夫(1981) : 劣等感の心理 金子書房
- 鋤柄亮子・吉田昭久・小熊均(1997): 劣等感情と承認の要求との関連 茨城大学教育学部紀要(人文・社会科学・芸術) 46 105-120
- 鈴木睦夫(1997): TATの世界—物語分析の実際 誠信書房
- 坪井順子(1984) : TATアナリシス 垣内出版
- 牛島義友(1948): 不良化傾向の早期発見: 性格の評定尺度と検査法 金子書房
- 柳井晴夫・柏木繁男・国生理枝子(1986): プロマックス回転法による新性格検査の作成について (I) 心理学研究 58(3) 158-165
- 吉田信仁・吉田昭久・小熊均(1988): 現代青少年の心理ダイナミズムの特徴〔Ⅲ〕—攻撃性の基底因としての「優劣感情」— 茨城大学教育学部教育研究所紀要 20 13-23

(心理臨床学講座 博士後期課程2回生)

(受稿2010年9月6日, 改稿2010年11月26日, 受理2010年12月9日)

Inferiority Feeling and its Compensation: From the Questionnaire and TAT

TOMOJIRI Naomi

Individuals sometimes have an inferiority feeling in human relationships and compensative action often accompanies inferiority feelings. In Study I, an Inferiority Feeling Scale was developed, and reliability and validity were established. The 272 subjects were divided into high (n=90), middle (n=92), and low (n=90) groups by score. From the relation with "Individual and Social PN Orientedness Scale," a strong inferiority feeling was related to the internal and interpersonal maladjustments, the lack of one implied egoism. Moreover, the author composed "A Scale of Inferiority Response Characteristics," and a factor analysis revealed 5 factors: effort orientation, defensive reaction, substitute behavior, resistance to display inferiority feelings, and denial of inferiority feelings. Subjects with strong inferiority feelings were more defensive and adopted less substitute behavior than those without inferiority feelings. In Study II, research using Thematic Apperception Test (TAT) suggested that high-score inferior feeling group (n=10) tended to assume internal struggles as a cause of negative self-image, to compensate for inferiority with imagination, and to be more dependent. In conclusion, individualization is no less important than socialization in the study of inferiority feelings and the characteristics of response to inferiority feelings differs between subjects who have a strong inferiority feeling and those who don't.